2011年度 人間科学会学術講演会
岡 朝子 先生「本は心の宝もの―こどもと読書体験―」

Ms. Asako Oka's Lecture at the 2011 Annual Meeting of the Association of Seiryo University Human Sciences
Title: The Heart's Treasure ―Children and their Reading Experience―

馬　場　　治　抄録
Summarized by Hajimu Baba

〈玉川こども図書館〉

〈講演者近影〉

〈こども図書館内部〉

日時：平成23年11月19日（土）10：00～12：00
会場：金沢星稜大学　本館101講義室

ポスター掲示文

情報メディアの発達に伴う若者の読書離れが叫ばれて久しいですが，近年，特にこどもたちの読書環境を整備し，読書体験を拡大していこうとする様々な動きが見られます。学校図書の充実，保護者や学生ボランティアによる絵本や物語の読み聞かせをはじめ，教育現場，児童館，図書館など，こどもたちが集う場所で本を通じた絆が強まる読書活動が展開されています。

感動する本との出合い，読書習慣は生涯教育への道です。教育に携わる方，子育て中の方，「本とこどもの心の発達」について，岡先生とご一緒に考えてみませんか。

□開催のご挨拶とご紹介

谷中

本日は，生憎の雨で足元の悪いところ，金沢星稜大学人間科学会の講演会にお運びくださり，誠に有り難うございます。司会で学会運営委員長の谷中と申します。今回は,「読書の秋」に因み，金沢市立玉川こども図書館長の岡朝子先生をお招きして,「本は心の宝もの―こどもと読書体験―」と題する講演をしていただきます。開催に先立ち，学会代表の村井学部長からご挨拶申し上げます。

村井

皆さん，おはようございます。藪から棒ですが，皆さんは何か宝ものをお持ちですか。本日の演題に因んで，僕も久しぶりに本を買いました。将棋棋士の羽生善治さんの『大局観―自分と闘って負けない心』というタイトルの新書です。さて，新聞社が実施したアンケート調査によると，小中高を通じて好きなジャンルは伝記で，男子はイチローの努力，女子はヘレンケラーの献身といったテーマに感動し，最も人気が高くなっているそうです。ご参考に。では，運営委員の馬場が講師の岡先生のご紹介を申し上げます。

馬場

僭越ながら，講師の略歴をご紹介させていただきます。岡先生は，昭和47年に犀川小中学校の教諭となられ，以後，金沢市の中学校に勤務されました。更に，県教育委員会及び金沢市教育委員会の指導主事を務められ，平成11年には大徳中学校の教頭，その後も，城南中学校長及び清泉中学校長といった要職を歴任され，退職後の平成20年11月，玉川こども図書館長に就任されました。城南中学校長時代には中国大連市第65中学との友好交流に調印し，金沢市教育の国際化を促進されました。「梅」をモチーフにしたマスコットキャラクター「うめたま」でお馴染みの玉川こども図書館は市内中心部の玉川公園に隣接し，蔵書数約10万冊，紙芝居約２千点を備え，子どもが読みたい本や情操が豊かになる本を探し求める親子連れでいつも賑わっています。図書の選定からお話し会や展示会などの魅力的で多彩なイベントの企画運営,「金沢子ども読書推進プラン21」に基づく読書活動啓発に関する情報発信，また，ミャンマーの小学校へ日本の絵本を寄贈するといった国際活動まで，ご多忙な館長業務に従事されています。本日は，ご多用中のところ，スケジュール調整をしてくださり，子ども時代に生涯の糧となる素敵な本と出会うにはどのような環境を整え，どうすればよいかについて有益なご講演をいただきます。岡先生，宜しくお願いいたします。

岡館長

皆さん，おはようございます。星稜大学さんについては，私が教師時代にお世話になった村井学部長さんや，こども図書館へ音楽イベントでボランティアに来てくださる谷中先生を始めご縁がございますが，私自身は，大学生の皆さんの前でお話しをするのは実は初めてで，非常に緊張しています。これから皆さんに作家などの専門職ではなく，読書を推進する立場として，子ども時代と読書の関係や，若者の活字離れ・読書嫌いといった現状のなかにあって読書はどのように必要なのかという観点から，少しお話ししたいと思います。

お話しの構成は，お手元のプリントの項目どおりでパワーポイントに従ってお話します。私の経験を交えていきますので、話があちこち飛ぶかもしれませんが，どうぞ気楽に，リラックスしてお聴きください。

さて，学生の皆さんは「あなたの宝ものは何ですか」と問われれば，何と答えますでしょうか。私は，金銭や宝石以上に，「あってよかったなあ」と今しみじみ思えるのは，本を読む習慣があることです。

長い人生において，様々な読書の体験は生きる上で私に非常に豊かな気持を与えてくれています。親が本を読み聞かせてくれたのか，自分がよく読んだのかは忘れてしまいましたが，読書習慣がついていてよかったなあとしみじみ感じています。

若い皆さんには，「自分の宝ものはこれだ」とは未だ分かりにくいかも知れません。しかし，年齢を重ねて色々と学ぶうちにそれが見えてくる。勉強はそれ自体が目的ではなく，人生において大切なものを見つけるために勉強する必要があるのだと思います。

私は，３月11日に起こった東日本大震災のニュース映像で，倒壊した自宅の瓦礫の中から１枚の家族の写真を懸命に探し出し，泥の汚れを手で拭う男性の姿に感銘を受けました。きっと，家族の想い出や生きた証の一杯詰まったこの１枚の写真が，悲惨な災害に遭った今後のこの方の人生を支える大切な宝ものになるのだろうなと思いつつ画面に見入りました。宝ものは人それぞれ違っていると思いますし，確かな形になっているものでなくてもよいかも知れません。

私の経験からすると，本というものも私にとって，宝ものと呼べるに相応しいと考え，本日の演題をつけました。

若者の読書離れが進んでいる現状を各界が重く受け止め，今，各地の図書館や学校では様々な読書推進事業が進められています。

ところで，今から図書館について学生の皆さんにいろいろお尋ねしたいと思いますので，挙手したり答えたり，お願いします。まず，「世界で最も古い図書館」はどこにあったか皆さんはご存知でしょうか。（以下質問していく）私が調べたところ，紀元前７世紀頃にあった古代メソポタミア・アッシリア王国の調査で発掘された粘土板に文字が刻まれた文書館がそうです。次が，紀元前３世紀のアレクサンドリア大図書館で，パピルスが70万冊ほどあったということで，当時は手書きでしたから，記録には膨大な労力が費やされたことでしょう。

時代はくだって最近の図書館は，人類の知的財産であり，未来を担う若者にもっと活用してもらおうという試みが盛んになっています。

では，小学校や幼稚園の先生を将来めざしているこども学科の学生さんである皆さんは，石川県や金沢市の読書の現状はどうなっているかご存知でしょうか。皆さんの小中学校時代とは違っているかも知れませんので，近年の動向を少しお伝えしておきます。石川県の朝読書については全国トップクラスで「石川学びの指針12箇条」中でも読書を大切な柱の一つとして位置づけ，全県挙げて取り組んでいます。また、北陸三県及び新潟県は読書活動で全国でもトップクラスであり，それに比例して学力調査でも全国で上位を占める割合が多くなっており，読書と学力には関連があるというデータを窺わせる結果となっています。

金沢市については，小学校の95％が朝読書を行っており，石川県全体もほぼ同様の傾向と聞いています。

玉川こども図書館は，学校や家庭と連携して「読書活動を推進する拠点施設」としての役割をもち，平成20年11月８日に開館し，今月ちょうど３周年を迎えました。１年間の来館者数は約20万人，３年間で61万人超となりました。最初は，「こども図書館といっても，平日は園児や児童は，保育園・幼稚園・小学校にそれぞれ通っている訳だから，実際どれくらいの来館者があるのだろう」と心配でした。

ところが，開館してみると，平日で400人前後，土日で700～900人前後の来館者があり，予想以上の来館者数となりました。この図書館を来館者の方にご利用いただくなかで，「とてもいいなぁ」と常々思って拝見しているのは，土日にお母さんだけでなく，お父さんもお子さんを連れて来られ，父子で一緒に並んで座って本を読んでいる様子をよく見かける時，また，おじいちゃん・おばあちゃんがお孫さんを連れて来られ一緒に本を楽しんでおられる時です。本を絆とした温かい雰囲気にいつも心が和みます。家族の中でお子さんの読書を大事にされている様子が窺われ、こういう習慣をこども時代に持つことの素晴らしさに心が膨らみます。

私は長らく中学校の国語科教師をしておりましたので，生徒たちの読書離れが進んでいることを教育現場で実感して憂慮していました。大学生の皆さんは読書にどのような関心をお持ちか分かりませんが，およそ中学校２年生頃から高校生にかけて読書が「好き」から「嫌い」に逆転する傾向があるようです。大学生の皆さんは如何でしょうか。「好

き（趣味）」「どちらでもない」「嫌い」の三択でお聞きしますので、参考までに，挙手でお示しください。（挙手で聞く）後で時間があればその理由も聞いてみたいです。

先ほど，村井学部長先生がご挨拶のなかで「伝記」のお話しをされました。毎年実施される全国学校読書調査ではどうなっているでしょうか。小中高約10万人を対象に学校を選定してアンケートをとっているのですが，小学校５，６年生の男子で昨年も一昨年も１位になった本は，この集英社版学習漫画『日本の歴史』です。きっと，皆さんの中にも読んだことのある人がいると思います。同じく女子で連続１位になった本は何かご存知ですか。テレビドラマ化もされた，『若おかみは小学生』です。中学１年生男子の第１位は『三国志』です。ところが，２年生・３年生では嗜好が変化して，山田悠介さんの『リアル鬼ごっこ』となります。女子の第１位も話題になった作品は，ケータイ小説の『恋空』です。２年生・３年生では，湊かなえさんの『告白』で，映画化されました。このように，学年や性別でかなり興味や関心が異なっています。活字だけでなく，ビジュアル化されたものを好むようですが，先ほどの村井学部長さんのお話のように、伝記物は学年を問わず人気があります。

さて，クイズ形式で皆さんにお聞きすることが続いて恐縮ですが，皆さんはなぜ本を１冊２冊と数えるのかご存知でしょうか。本の歴史を繙くと，先ほどの粘土板ではありませんが，紙が発明され普及する以前には，木や竹の札に墨で文字を記していました。これを革紐で編んだ物が木簡や竹簡で，その束ねた形態を冊と呼んだことに由来します。時代がくだると，写経などで知られる紙媒体の巻子本となります。やがてそれは，横に長く繋ぎ合わせた紙を一定間隔で折り畳んで作る折り本や，和紙を糸で四つ目綴じにする和本となります。これらは，そのレプリカ（複製）ですが、書物の歴史が窺えます。（複製提示）

さて，本に纏わるお話しをしてきましたが，今日の本題に入りたいと思います。お手元のプリントをご覧ください。

お話ししたい項目は次のとおりです。適宜パワーポイントの画面を交えながら進めていこうと思います。

（パワーポイントの画面による）

１　子どもたちの読書の課題

・読書の二極化傾向
・活字離れ
・大人の文化や生活との関連

２　教育課題としての「生きる力」

３　子どもたちと読書体験

・教育と読書
・本と人が響き合う読書
・「子どもの心理社会的発達」と本

４　「子ども読書活動の拠点」としてのこども図書館

①本に親しむ
②ネットワークづくり
③学ぶ，活動する

５　読書に関わるこどもたちの現状

６　読書のきっかけをつくるために

・子どもの側からの見たい，知りたい，楽しみたいを大切に

７　良書との出会いを

８　本が子どものなかに育てるもの

９　こども図書館の活動紹介

10　これからの図書館像

・市民目線での図書館づくり
・住民の課題解決支援
・学校図書館との連携強化

「学校読書調査」（第55回、56回）から窺える子どもたちの読書の課題はいくつかありますが，まず，目につくのは「読書の二極化傾向」です。先ほど大学生の皆さんにもお尋ねしましたが，中学校から高校にかけて「好き・嫌い」「読む・読まない」がはっきりと二極化しています。この傾向は，日本だけではなく世界中かと言うと，後ほどお示ししますが，そうではない国もあります。

この違いは，子ども時代における読書の大切さへの認識にあるのかもしれません。子ども時代は短いけれども、とても大切です。『星の王子さま』の著者サン・テグジュペリは「私の故郷は，私の子ども時代である」と繰り返し語っています。この言葉は，人生における土台としての子ども時代の大きさ，重要さを象徴しています。子ども時代は短いけれども，明日の未来や大人の自分に繋がっているということです。

子ども時代の興味や過ごし方が，後の人生につながっていることの例を紹介しますと，例えば，『昆虫記』で有名なアンリ・ファーブルは「幼い頃，庭に咲いたリンゴの可憐な白い花に魅せられ，一晩中飽きずに眺めていた」「５歳の頃，道端でしゃがんで何時間もアリを観察し続け，不審者として警察に捕まった」等のエピソードがあります。また，『十五少年漂流記』で有名なジュール・ヴェルヌは10歳の頃，憧れの従姉に珊瑚の首飾りをプレゼントしようと親に内緒でインド行きの船に乗り込んで出航しますが，親に連れ戻されます。ヴェルヌは後に，この時の体験を活かした冒険小説を書いています。ファーブルやヴェルヌのような体験は直接には難しいですが，せめて本を通して，多感な子ども時代に想像を膨らませ，夢や浪漫を抱く機会を与えたいものです。

さて，ここからはパワーポイントを使って説明していきます。２つ目のパワーポイントにある教育課題の「生きる力」ですが，教育では，平成元年以来，子どもたちの「生きる力」を如何に育成するかが課題となっています。それは，昭和の終わり頃から，子どもたちの不登校や引き籠もり，自殺

などの非社会的な行為が目立ってきたからで，その現状を憂慮し，根本的な解決に向けて文部科学省が掲げたキーワードが「生きる力」だった訳です。

社会的には世界のグローバル化が進み，しかも，地球規模で共に考えていかなければならないエネルギー問題や環境問題，食料問題等が多くある中，この国際化社会にどう対応していくかも「生きる力」を育む大きなポイントです。

こども図書館では，世界の絵本の読み聞かせを通して，絵本の主人公や，その国の文化に親しみながら，国際感覚を養い，将来の国際化社会に向けて，人として生きるために必要な力を育むという視点で活動を展開しています。

秋には，「世界絵本フォーラム」を開催し，金沢在住のエジプト，ルーマニア，ドイツ，フランス，中国，韓国の方々がボランティアとして，自分の国の絵本を原語で読み聞かせてくれ，大好きな1冊を子どもたちに紹介してくれました。国際ボランティアの方も30人を越え，身近な金沢という地でも国際化が進んでいるなと感じました。

「生きる力」というキーワードは言葉として理解することは簡単ですけれども，実際に自分の身体や体験を通じて体得することは，現代では，難しい部分があります。宮沢賢治のように，星を眺めて石と語らうといった直接自然と触れたりする機会も減ったり，できにくくなっています。

このように，直接体験する機会が少なくなってきている子どもたちが，自分以外の世界に暮らす人々の人生を知る工夫を大人は考えてあげる必要があるのではないでしょうか。私は，そのためには読書が欠かせないと考えるひとりです。１冊の本には単なる情報や知識だけでなく，その人の人生が詰まっていると考えるからです。

沢山の本を読むことは，沢山の人生を知ることに他なりません。本は，ただ紙と活字でできているものではなく，本には命があります。なぜなら，子どもたちや読者に何かを伝えようと願った作者のスピリット，精神が込められていると思うからです。

本を通じて他者の人生を知り，命の重みを知ることが，子どもたちの「生きる力」を育み，地球規模での共に生きることに繋がっていくということを，大人はもっと認識する必要があるのではないでしょうか。

さて，私は長く教育に携わって参り，今また読書に関わっておりますが，教育と読書には似ている点があると思います。教育とは，情報や知識などの多くの文化的価値や情報を教えて伝え，教師から児童生徒への一方的な注入のように思えるのですが，私の長い教員生活を振り返ると，教育とは教え込んで成り立つものではなく，子どもたちの中にすでに存在している能力や可能性と響き合い，それを引き出すことだと思います。読書もまた，その人のなかにあるものと響き合い，感動を引き出すという点で共通しています。

ですから，自己の内面に何もないと反応することができません。難しいのは内面を育てておくこと，内面が育っていることです。

鎌倉時代の社寺や仏像の彫刻で有名な運慶や快慶といったレベルの達人は弟子の問いに，「彫刻とは，木の特性に合わせ，木の中の魂を彫り出すことだ」と答えたそうです。

ある宮大工さんは，「何百年と年輪を重ねた命の息吹や力強さを具えた木に，更に建築用の素材として千年の命，耐久性を持たせるために素材を吟味し，寒い北側で育った木は北側に，暖かい南側で育った木は南側にといった具合で，柱や梁の適材適所を心掛けている」と語ったそうです。

彫刻家や宮大工は木が相手で，教育や読書は人間が相手ですが，素材の内面にある特性を引き出すことは同じです。

さて，「読書はいつ頃から始めればよいか」とよく問われます。この質問に関して参考となる『世界子供白書2001』が，インターネットで閲覧可能なユニセフのホームページに掲載されています。ユニセフが世界各国の０歳から３歳までの子どもを持つ家庭を対象に調査した結果によるものです。驚いたのは，この報告書には，「子どもが３歳になるまでに脳の発達がほぼ完了する。新生児の脳の細胞は多くの成人が何が起こっているかを知るずっと前に増殖し，シナプス（神経細胞相互間の接続部）による接合が急速に拡大して，終生のパターンがつくられる。わずか36カ月の間に子どもは考え，話し，学び，判断する能力を伸ばし，成人としての価値観や社会的な行動の基礎が築かれる。生後の何年かは子どもの人生にとって，非常に大きな変化の時期であり，長期的な影響をもつので，子どもの権利の保障は子どもの人生のスタートの時点で開始されなければならない。この大事な時期に子どものためにどのような選択をし，行動をするかが，子どもの発達だけでなく，国の前進に影響を与える」とあったことです。この報告書によれば，たとえ脳細胞が１億あっても，言語中枢に感情を込めた適切な言葉を送って刺激しなければ，シナプスは形成されないことになります。生物としては，０歳から３歳までの脳の発達には充分な栄養と奇麗な水が必要です。更に，人間としては，大人や家族との会話や触れ合いが同等に重要です。

人と直接関わる体験は大切ですが，赤ちゃんの場合，大人が語りかけることはできても，互いに対話することは未だ無理なので，抱っこやスキンシップを交えながら絵本を読み聞かせることは，胎児の頃から聴覚が発達している赤ちゃんにはとても効果があり，人格形成上も重要な働きかけといえます。

では，３歳を過ぎるともう遅いのかというと，エリクソンの人格発達理論によると，ライフサイクルという観点で「いつの年代であっても，人の発達は環境からの相互作用を受ける」と説いています。この学説は，思春期の中学生を

教えていてなるほどと実感しました。

いずれの年代も大事なのですが，しかし，０歳から３歳までの期間は，人生のスタートを切る土台としてやはり特別ではないでしょうか。

そういう意味もあり、こども図書館では，絵本の勉強だけでなく、発達を踏まえた絵本の紹介ができればと考え，大学の発達心理学の教授とともに、「子どもの発達と絵本」の研究会を２年間行い、身体及び精神の発達と絵本の役割との相関を研究しています。今春その成果報告書を出す予定です。

エリクソンの心理的社会的発達段階によって年齢ごとに見ると，「乳児期」は人と人との信頼関係を築く時期だと言われています。そんな時こそ，絵本を通して身近な人との絆を作る最適な時です。抱っこしながら，また顔を見ながら身近な親や祖父母の膝の上で絵本を読み聞かせることはささいなことのようにも思えますが，この年齢の時代，言葉にならないノンバーバルコミュニケーションを取ることは，今後の人格形成や人間関係を築く上で重要だと研究会を通してわかりました。

何らかの事情で，乳児期に信頼関係を巧く築くことができないと次の段階には進めず，支障が出る掛け替えのない大切な時期だそうです。

次に，「幼児前期」は自律性，「幼児後期」は自発性を育む時期です。自律も自発も，何にでも興味を持って自分でやってみようとする行動をさしています。

こども図書館でも時折、幼稚園や保育園のお子さんで，親が「これにすれば」と勧めても自分の大好きな絵本が決まっていて，「これでなくちゃ嫌だ」と大好きな絵本をしっかり抱えている姿を見かけます。自分の興味や関心，大好きなことに次第に自我が芽生えて来ているのでしょう。

また，「なんで」と何でも質問してくるのは，幼児後期の特徴の一つだそうです。それに対して大人は面倒がらず，「それは，〇〇だからだよ」と分かる限りきちんと答えてやることがコミュニケーション上，また信頼関係の構築上大切です。また，お母さんやお兄ちゃんのすることを何でも真似したがる「同一視」も，この時期の特徴の一つです。

友達関係が築かれる学童期は，勤勉さを育む時期です。読書でいうと，小学校も高学年になると，「読んでもらう」から「自分で読む」段階に進みます。この段階を自分でクリアしないと，朝読書でも「先生に読んでもらいました」「先生に読むよう言われました」と受け身のままで終わってしまいます。「興味のある本を自分で探して読むようになるかどうか」が読書の自立への分かれ目となります。

小学校時代に、勉強・運動・遊びと沢山の面白さのある生活の中に「本」が加わり，「自分で読む喜び」を味わえるようになれば，本を通して人生に沢山の選択肢があることが感じられるようになるのではないでしょうか。

中学校からやがて青年期に入りますが，第二次反抗期も含めアイデンティティと呼ばれる自我が確立されていきます。異性に関心を持ち孤独感を覚えるのもこの時期ですが，人間関係は他者，人を抜きにしては成立しません。自分だけでなく，他の誰かと関わり合いながら生きていくことを理解して社会的な人間となる。だから，多感な青春時代に様々な人生の詰まった本の世界の広さや深さに気付き，生涯の精神の糧，心の栄養となるような本と出会うということはとても大切だと思います。

このように，子どもたちにとって大きな働きをする読書ですが，日本の国の読書の法律はどうなっているのでしょうか。

平成13年に文部科学省が出した「子どもの読書活動の推進に関する法律」には「子どもの読書活動は，子どもが言葉を学び，感性を磨き，表現力を高め，想像力を豊かなものにし，人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものである」と謳われています。この言葉からも，読書という営みが単なる趣味ではなく，人間形成や「生きる力」と強く相関していることが分かります。こども図書館は「子どもの読書活動の拠点」として，「ネットワークづくり」「本に親しむ」「学ぶ，活動する」といった機能を持って子どもたちの読書をサポートしています。

では，日本の子どもたちや世界の子どもたちの読書や学習についての現状はどうなっているのかという点について，少しお伝えしておきます。

まず日本の小中学生の読書傾向は，「学校読書調査」によると，2000年から2009年にかけて，学校における朝読書の普及もあってか，「読書を楽しむ」という回答が増加しています。「読む本の種類」では，小説・物語・実話が高く，新聞・漫画・雑誌は低くなってきています。

世界の傾向は，OECD（経済協力開発機構）の調査結果によると，「趣味としての読書をする」の順位は，上海92％，台湾83％，香港80％，アメリカ58％，日本56％，オランダ51％，となっています。これは，中学校を卒業したばかりの高校１年生を対象としています。日本の56％は割と高いと思えたのですが，中国の三都市に比べるとかなり低く，世界の順位では下から２番目でした。世界的に見ても，日本の若者の「読書離れ」傾向が数字に現れています。

また，日本とは逆に，アジア地域で新たに力を付けてきている国の若者は，読書だけでなく、学力も高いことがOECDの調査結果からもはっきりと読み取れます。

将来，日本の若者が30代，40代になった時，読書による情報や知識の蓄積の差というものが膨大になってくる恐れがあります。益々グローバル化する国際世界で日本人が同じ土俵で闘わねばならなくなる時，この差が心配です。

OECDの調査結果の中には「総合読解力」という項目もあります。最近，新聞にもよく出てくる「読解力」とは何

かというと，昔は，国語科でいうと「読んだものについて何が書かれていたか，その内容を精確に取り出し返答できる能力」を意味しました。しかし、今は，その上に情報化社会に必要な生きる力として更に，「その内容を批正し，自分の考えを組み立てて意見を述べることができる能力」までが要求されるようになりました。従って，読解・批判・意見・表現といったインプットからアウトプットまでの一連のまとまった能力を「総合読解力」といいます。

また，「１日に１時間から２時間は読書をする子」や「ネット上のチャット・討論会・フォーラムに参加する子は，総合読解力が高い」という結果も出ています。日本の若者は，チャットはしますが，討論会への参加は少なく，そういった場で自分の考えや意見を適切に表現する力や発信する力が弱いということです。インターネットが発達し，世界的に情報化時代となっているので，日本の若者も臆することなく，もっとどんどん積極的に意見交換の場にも参加すればよいと思います。

皆さんは，「読書の国フィンランド」ということをよく聞くと思います。それは，「国民の80％が図書館を利用」「親から子どもへの読み聞かせが定着」「国民一人あたりの平均貸出冊数年間20冊」といった読書が国全体に浸透している現状から象徴されている言葉です。

フィランドは，参加国が共同して国際的に開発し，義務教育修了段階の15歳児を対象とした「OECD生徒の学習到達度調査」において，読解力，数学的リテラシー，科学的リテラシーの３分野いずれもトップクラスを占めています。

読書調査でもPISA調査でもトップクラスであるということは，やはり読書と学び考える力に相関があるからです。

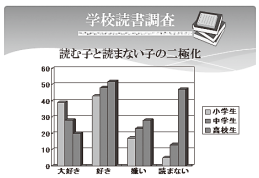
私は，これらの数値もさることながら，「読書の国フィンランド」がどのようにしてできたかについて感心させられたことがありました。北欧のフィンランドは，社会福祉が非常に行き届いた国であることを皆さんもよくご存知でしょう。

ところが，社会福祉が整い過ぎていたために弊害が出た時期があったそうです。1990年代後半のことですが，「あまり働かなくとも国が面倒をみてくれる」といった怠惰な風潮が蔓延し，若者の勤労意欲が低下しました。「税金は高いけれども，安心して暮らしていける社会」は，若者を無気力にしてしまいました。そこで，フィンランド政府が取った教育施策は，若い教育局長を登用し，説教や義務の押し付けではなく，読書を国全体の施策として振興し，子どもたちに欠けている，深く感じ考える力や想像力を養うために，国を挙げて「読書の国フィンランド」を作ろうとしたのです。この施策を根気よく継続したことで，国民の間に読書の習慣が定着し，子どもたちの学力も向上し，OECDの調査結果でもトップクラスになったという訳です。

こうしたフィンランドの「教育に対する基本的考え」は意外にシンプルで，「教育とは，地球規模で貢献できる，他者のことも考えられる若者を育てること」としています。わずか35字ほどの文ですが，その中に国として若者を育てる強い意志や気概が伝わって来ます。これは，フィンランド大使館の中にある日本フィンランドセンター所長の講演を聴いて知ったことです。また，フィンランドの小学校の校長先生が，「私の学校では，子どもたちに温かい雰囲気の中で失敗を経験させ，失敗から学び，立ち直ることのできる力を身に付けさせるよう工夫しています。失敗のない人生はありません。いかに失敗を周囲の大人が温かく包み、支援できるかです」といわれました。

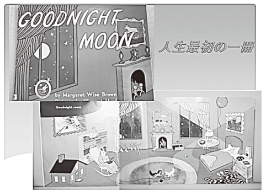
人間を作っていく姿勢の教育で素晴らしいと思いましたが，やがて，このような教育による人間力の差が彼我の国力の差となって現れるのではないかとも心配になります。

日本の「学校読書調査」に戻りますと，これは昨年度のデータですが，この棒グラフのように，小中高とだんだん大きくなるにつれ「好き・嫌い」「読む・読まない」の差がはっきり現れてきます。



このような二極化，読書嫌いになるのを防ぐためには本の楽しさをより実感してもらうよう改善する必要があります。こども図書館では，「読書のきっかけ」として「良書と出会うことから」「興味・関心のあることから」「話題性や好きな作家から」「学習での必要から」と考え，読書に親しむきっかけづくりを多様に呼びかけています。

良書には，おもしろさ・発見・感動の三つの要素が入っています。今，時代に迎合する安易な本も沢山出回る中，大人の役割として，本当に子どもの心の糧となる良質な本を選んでこどもたちに手渡したいものです。沢山の良書の中から，今日は私が選んだ具体的な何冊かをご紹介したいと思います。まず，『GOODNIGHT MOON』。（おやすみなさい　おつきさま）子どもが自分で少し読めるようになったり，大人が読み聞かせたりするのに最適な本です。



ウサギの赤ちゃんが窓から見えるお月さまに「おやすみなさい」，生活している部屋のネコもオモチャもすべてを友だちと見なして「おやすみなさい」と挨拶して眠りにつく様子を絵本にしたもので，この絵本を紹介したのは大統領

になる前のオバマ氏です。氏は2005年６月に行われたアメリカ図書館協会の年次大会における基調講演の中で，人間の最も基本的な素養としての読書の重要性について語りましたが，特に，子どもの幼少期における親の役割として次のように触れています。「親は子どもに読み聞かせをする時間を，また読んだものについて共に語る時間を作るべきである」「子どもの人生最初の一冊として“おやすみなさい お月さま”（原題：Goodnight Moon）を薦める」と。

以前，皇太子妃の雅子さまも在米中の幼少期にこの絵本に親しみ，「思い出の一冊」として紹介されたことがありました。この絵本は，アメリカ社会に深く浸透しており，1947年の発行以来，１千万部を超えるロングセラーとなっています。アメリカの家庭における読み聞かせの定番です。

我が国においては昨今，人と人とのコミュニケーションの欠落が問題視されており，心を痛める多くの事件が起きています。このような現状にあって，読書こそ，他人を思い遣る心や，情操を養うために最適なものなのではないでしょうか。“人生最初の一冊”は人によって違うでしょうが，人間の基本的素養としての読書，育児における読み聞かせ，それらの重要性を皆さんとともに今一度見直したい気持で一杯です。

次に，『ともだちのしるしだよ』。この絵本は，東京都の板橋区立「いたばしボローニャ子ども絵本館」主催の翻訳コンクールで第15回「いたばし国際絵本翻訳大賞最優秀翻訳大賞」を受賞した作品で、内容的にも，国際化時代に生きる小中学生にぜひ読んでもらいたい一冊です。

北イタリアにあるボローニャ市で毎年春に開催される「ボローニャ児童図書展」には世界中の出版社から優れた絵本の新刊書が集まり，出版関係者や絵本愛好家などに広く知られて有名ですが，そこに出展されたものが原本です。

物語の舞台は，アフガニスタンとパキスタンの国境沿いにあるペシャワールという街の難民キャンプです。作者のカードラ・モハメッドさんは，ピッツバーグ難民救済センターの所長さんです。アメリカ国内外で難民救済のための支援を長い間続けてこられた方で，自分が実際に難民キャンプで見聞きした現実を絵本にしたものです。なぜ絵本にしたかというと，世界の難民は２千万人以上いるらしいのですが，その大半は子どもたちで，その辛く苦しい生活ぶりは，時々ニュース報道される程度で，あまり世界に伝えられていなかったからです。そんな折，「難民キャンプで暮らす子どもは多いのに，なぜ，私たちみたいなこどもを描いた絵本はないの？」という或る難民少女の素朴で切実な質問がきっかけとなり，カードラ・モハメッドさんは，この物語の絵本を作ることにしたのです。

英語の原題は『Four Feet，Two Sandals』。作者二人の献辞には「同好の士であるカードラと，きっかけをくれたザニブに」「友だちや家族とわかれ，故郷をはなれなければならない，すべての難民の少女たちに」とあります。

翻訳者である小林葵さんは1992年生まれ。学生の皆さんと同じ年代ですね。受賞当時は現役の都立高校生でした。

絵本の表紙は，右側ピンクの服を着てバスケットを持っているのがリナ，左側グリーンの服を着てバケツを提げているのがフェローザといいます。二人の足元を見てください。青い花飾りが付いた黄色いサンダルを片方ずつ履いていますね。これが，原題と翻訳を象徴する物です。

二人は，別々の場所から戦火を逃れてこの難民キャンプにやって来ました。衣食住の粗末なテント暮らしでは，生活用品に事欠きます。時々，救援物資を積んだトラックが配給のためにキャンプに来るのですが，大人の人波に混じって何か物を分けてもらおうとしたリナは，地面から青い花飾りが付いた黄色いサンダルを片方だけ拾いました。

もう片方はどこだろうと探していたところ，フェローザが履いていました。お互いに片方だけ。リナはフェローザに「こんにちは」と挨拶するのですが，彼女は見つめるばかりで，急に背を向けて行ってしまいます。

リナの靴は，弟のナジーブをおんぶして長い道程を歩いて難民キャンプまで辿り着く間にボロボロになってしまいました。リナは，もう２年間も靴を履いておらず，裸足でした。

ある日二人は，小川の流れる洗濯場で再会しました。お互いは名乗り合うと，リナは，サンダルを両方とも差し出して言いました。「二人の物だよ」

フェローザも笑顔になると，サンダルを受け取って履きました。「明日は，あなたの番ね」こうして，サンダルは片方ずつ履くのではなく，一日交替で両方履くことになりました。これ以来，二人は打ち解けて仲良くなり，辛い身の上話や思い出話もするようになりました。

ある朝，二人は小川へ行って，サンダルを洗って奇麗にしているとフェローザのおばあちゃんが呼びに来て，帰国者の名前のリストにリナの母親の名が載っていることを伝えます。二人は分かれる運命となりました。

別れの日、「見て。お母さんが針仕事で貯めたお金で靴を買ってくれたの」とリナ。「本物の靴だね」フェローザは，新しい黒の革靴に見とれました。「はい，今日はあなたの履く番だよ」とリナはフェローザに，黄色と青の色褪せたサンダルを渡します。そして「元気でね」と言いました。リナは，周りの人に続いてバスに向かいました。「待って！」フェローザは友だちのところへ駆け寄り，片方をリナに渡

しました。「片方だけじゃ困るでしょ？」とリナ。「思い出のサンダルだから」と言うと，フェローザはもう一つを掲げました。「友だちの印だよ」

リナの頬を涙が伝いました。「アメリカでまた一緒に履こうね。きっとだよ」二人は，このようにして別れました。

後年アメリカで二人が再会できたかどうかは分かりません。しかし，この一冊の絵本は，国際紛争のこと，友情，引き裂かれた家族といった様々な問題が，実際身のまわりで起こっている子どもが主人公であり，様々なことを私たちに語りかけてきます。この絵本を通じて，子どもたちに，今そばにある自分の身近な家族や友だちのことを，また戦争と平和について広い視野で考えていく良い絵本だと思い，児童生徒が訪れた際にも紹介しています。

次に，おじいちゃんと孫の温かい交流を描いた『だいじょうぶ　だいじょうぶ』を紹介します。

（全文朗読。ここでは概略紹介）

「ぼく」が主人公。今よりずっと赤ちゃんに近く，おじいちゃんが今よりずっと元気だったころ，おじいちゃんとぼくは毎日のように，お散歩を楽しんでいます。散歩は，遠くの海や山をぼうけんするような楽しさにあふれています。でも，新しい発見や楽しい出会いが増えれば増えるだけ，困ったことや，こわいことにも，出会うようになりました。だけどそのたびに，おじいちゃんが助けてくれました。おじいちゃんは，ぼくの手をにぎり，おまじないのようにいつもつぶやくのでした。「だいじょうぶ, だいじょうぶ。」「だいじょうぶ，だいじょうぶ。」それは，無理してみんなと仲良くしなくてもいいんだってことであり，言葉が分からなくても，心が通じることもあるってことでした。

おじいちゃんとともに何度もその言葉を繰り返しながら、こうして大きくなったぼく。今おじいちゃんは，ずいぶん年を取りました。ぼくは絵本のなかで言います。「だから今度はぼくの番です」（病院に入った）おじいちゃんの手をにぎり，何度でも何度でもくり返します。「だいじょうぶ　だいじょうぶ。」だいじょうぶだよ，おじいちゃん。

この絵本はここで終わっています。誰もが，小さい時愛情を一杯受けて育ち，また，その愛情を家族に返していく温かな人生の応援歌のような作品です。大切なものに，はっと気づかされる絵本でもあります。

実は，この絵本は金沢市のPTA協議会の皆さんが，「親子で一緒に読んでみたい本」のアンケート調査を全小学校に実施し，集計など大変な苦労末に選んでくださった絵本100冊，本100冊の中の一冊です。

次に紹介したいのは，『１年に１度のアイスクリーム』。豊かさとは何かということを，しみじみと考えさせられる絵本で，大人の人にも勿論，小中学生にも，楽しんで読んでもらい，また，一緒に考えてほしい一冊だと言えます。

作者のロビン・ロイドさんは，アメリカのイリノイ州出身の詩人で音楽家。世界中の子どもたちを訪ね，その様子や彼らの気持を詩にしています。幼い頃から音楽活動を始め，民族音楽に興味を持ち，世界の様々な国に住み，学び，旅をしてきた方で，管・弦・打の楽器を駆使したライブ活動も好評です。こども図書館では秋に，この絵本のイラストを並べて「ロビンとガクの絵本展」を開催しました。また，11月20日の日曜には，著者で民族楽器奏者のロビンさんをお招きし，集まった子どもたちに音楽遊びや作曲を交えた絵本の読み聞かせをしていただき，大変好評でした。

先ごろ，国民総幸福量を国の指標とするブータンの国王夫妻が来日され話題になりましたが，「本当の豊かさとは何か」，アイスクリームを１年に１度しか食べられないトウィーは不幸で，毎日食べられる私たちは本当に幸福なんだろうか，と改めて自分に問いかけたくなりました。

１年に１度，祭りの日にだけ都会からクーラーボックスに入れて運ばれてくるアイスクリームを食べられる中国・ミョウ族の女の子が，急いで食べればドキドキワクワクはあっという間だけど，ゆっくり味わいすぎると？！溶けてしまう様子が描かれている場面が印象的です。

次に，子どもたちが，「興味・関心があるところから」読書に親しむためにどんな本をという，本の案内としては，司書の方たちが選んだ『キラキラ読書クラブ 子どもの本644冊ガイド』があります。とても分厚くて重たい本なので，本日は持って来ませんでしたが，例えば，ジャンルやテーマ別でどんな本を読めばよいのか迷う時大いに参考にしてください。野球という分野を見ると『キャプテンはつらいぜ』『ちびっこ大せんしゅ』他，星という分野なら『パティの宇宙日記』『北極星を目ざして』他，夏休みなら『すばらしいとき』『はちうえはぼくにまかせて』他があるといった具体的な本が示してあり，いろんなジャンルの本が紹介されているのも特徴です。

次に，先ほどの金沢市のPTA協議会が、中学生が感動した一冊を同じ中学生にお薦めの本として挙げてもらったた

のが，「読んでみまっし 金沢市内の中学生が選んだ心に残るこの一冊」リストです。『小惑星探査機 はやぶさの大冒険』はその中の一冊です。

「中学生もタイムリーな話題の本を読んでいるなぁ」と感心します。「はやぶさ」については，ニュース報道などで皆さんよくご存知だと思いますが，沢山の感動的なドラマがありますので，こども図書館でも，この本を今年はよく紹介しました。著者の山根一眞さんはJAXAの方ではなく，フリーライターのノンフィクション作家です。７年前から「はやぶさ」について関心を持ち取材していたそうです。「はやぶさ」が無事に地球に戻って来なければ，７年間の取材はあまり意味がなかったかも知れませんが，粘り強い努力は報われた訳です。この本は「はやぶさ」が帰還して１ヶ月後に出ています。あまり報道されない逸話も紹介されています。

「はやぶさ」は地球に戻れないくらいエンジントラブルを何度も起こしています。最後には，４基のうち１基のエンジンしか起動しなくなりました。JAXAスタッフが頑張ってもなかなか修復しません。その時のプロジェクトマネージャー川口さんは，「はやぶさは地球に戻りたくないんじゃないか」と悩みます。「はやぶさ」が地球に帰還するためには，大気圏の中で燃え尽きなければならないから，それが嫌で，宇宙を彷徨っているのかも知れないとも想像します。しかし，「はやぶさ」の使命として，たとえ燃え尽きても地球に帰還させなければならないと川口さんは考え直し，あらゆる手段を講じて「はやぶさ」を地球に戻すことに成功します。

大気圏再突入からオーストラリアの砂漠に着地するまでの最後の瞬間については，次のように記されています。

「イオンエンジン」の燃料を徹底的に節約しながらぎりぎりの綱渡りを続けて地球帰還をはたした「はやぶさ」が，まだ「キセノンガス」を20キロも残していたことには驚いた。余裕の帰還だった。「はやぶさ」はそれらの燃料を，自らの最後の舞台を飾るためにたったの45秒で思い切り使いはたした。７年間の厳しいエネルギー節約モードが終わったことを知った「はやぶさ」は，ぼろぼろの全身からありったけの力をふりしぼり，壮大な星空を昼のように照らしてすべての使命から解き放たれた喜びをふりまき，私たちへの永遠の別れを告げたのだ。「はやぶさ」，君は，最後の最後まで大したやつだった。

“あとがき”には，次のような感慨が述べられています。

「はやぶさ」は７年間の宇宙大航海を通じて，人と機械との心の交流とでもいえるような、新たな関係をもたらした。それは，機械文明が始まってから経験したことのないことだったと思うと。

小惑星イトカワから採取した物質を入れたカプセルだけをウーメラ砂漠に遺して燃え尽きた「はやぶさ」の写真が心を打ちます。

次に『星の王子さま』を持って来たのはなぜかと言えば，「はやぶさ」が小惑星イトカワに着陸した時のインタビューの中で，その大きさはどれくらいかという質問に対し，「小惑星イトカワの大きさは直径500mくらいで，「星の王子さまの星くらいですよ」と答えられたとのことで，「科学者は同時に何とロマンをもっているものだなぁ」と感心させられたことでした。

こうした機会に，星というテーマで関連する本を併せて読むなりすると宇宙への興味も広がり，一層おもしろいでしょうね。

さて，ここから，本の紹介だけでなく，こども図書館の紹介もしたいと思います。こども図書館では，「学校支援」も大きな活動の一環としていますが，所蔵本を授業で使用したいという要望があれば１週間に１度本が50冊入るコンテナに詰めて各校に貸出をしています。この写真は，そのコンテナが学校への配送を待っている風景です。

昨年度のピーク時には，一日に99箱を配送しました。先日も77箱の貸出があり，嬉しい反面，注文が重なって本を探して集めるだけでも大変なことがあります。人気の椋鳩十の本が足りない時には，他の図書館から借りて都合をつけて配送する状況もありました。

本を貸し出すだけでなく，本に親しむ子を育成するために，ソフト面でも，学校，図書館ボランティア，公立図書館，PTA・地域の色々な人たちが架け橋となって，お互いが連携をとりながら，それぞれのところで読書に親しむ環境をつくるよう活動しています。

金沢市は，「金沢子ども読書推進プラン21～『子ども読書

のまち金沢』をめざして～」を策定しましたが，こども図書館は「本のバトンリレー」を豊かに紡ぐ中心的な役割を担っています。特に，PTAの方々と連携した「読んでみまっし」コーナーがあり，多くの子どもたちや保護者の方が借りていかれています。

何度も繰り返しますが，本は，紙と活字だけでできた命のないものではありません。本には，命があります。私が大好きなアンデルセン童話の『スズの兵隊』を描いた絵本作家のマーシャ・ブラウンは，「本が子どもの中に育てるもの」として「本の背後に込められている精神は，必ず人に語りかける。人間になるために苦闘する精神を導くのは，その精神なのです」と述べています。

書き手から子どもたちへ，子どもたちの心に響かせたい何かが真っ直ぐ伝われば，きっと子どもはその本を好きになるでしょう。お見せしている１本足で直立したスズの兵隊さんの，人形のバレリーナへの愛しさ，真っ直ぐな気持が伝わってくるようなマーシャ・ブラウンの絵ですね。

最後に，こども図書館の様子や活動の流れをご紹介するとともに、これからの図書館像について，お示ししたいと思います。

2010年は「国民読書年」でした。遡って，2000年は「子ども読書年」。更に，2001年12月には毎年４月23日の「子ども読書の日」が制定されました。これは，子どもの読書活動についての関心と理解を深め，子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めることを目的としています。

こども図書館も，この目的に適うよう様々な活動を続けています。この写真は，マスコットキャラクター「うめたま」が，香林坊アトリオの前で「子ども読書の日」を広報活動して，地元の中学生と一緒に記念写真を撮った場面です。

（以下パワーポイントにより館内風景の説明）

こども図書館はJT，元日本専売公社金沢地方局の建物を利用して改装されました。正面には，大正時代にたばこ製造工場の正面に設置されていた時計台があり，今では，玉川こども図書館の大時計として市民に親しまれています。

館内のカウンターは，子どもの背丈に合わせ低めになっています。館内は，子どもたちが喜ぶような季節の装飾が施され，地元の園児や児童の作品の他，毎月テーマを決めてコレクションを展示するギャラリーともなっています。時には，大学生や芸術家の作品を展示することもあります。

書架と書架との間には，窓側に向けて白いソファーが置いてあります。土曜や日曜，ここで，お父さんとお子さん，おじいちゃんとお孫さんが座って共に同じ本を読んでいる姿を眺めていると，ほのぼのとした温かい気分になります。

沢山の絵本が並んでいますが，絵本は子どものためだけにあるのではないので，大人が読むにも堪え，互いが感動する絵本を選び，子どもに与えてあげて欲しいと思います。

人気の「おはなしの部屋」では、毎日２回のおはなし会をおこなっています。また「初めての本との出会い講座」なども畳の部屋である「はじめまして絵本ルーム」で行っています。赤ちゃんがいるお母さん向けに「はじめましての絵本」のパンフレットも作成しました。

この畳の部屋も，ハイハイする赤ちゃんには格好の部屋として，お母さんだけでなくお父さんにも人気があり，寛いだ様子で利用いただいています。

「交流ホール」では，ハープ演奏の画面のように，本や物語に因んだ楽曲のミニコンサートが催されることもあります。150人を収容できますが，「ロビンとガクの絵本展」にお招きしたロビンさんの演奏もこのホールで行われました。

学校招待事業では，金沢21世紀美術館のアートバスを使って児童生徒を学級単位で送迎し，館内見学してもらったり，おはなし会をしたり，調べ学習を支援したりしています。

先ほどお話ししたボローニャ絵本展のコーナーも時期に合わせてあります。ここには，世界各国の作家の「世界の名作絵本」,「赤ずきん」や「人魚姫」が並べられたりします。国によって，また作家によって違う，本の雰囲気や色遣い，装丁が楽しめて多くの方が立ち寄られていきます。

絵本の展示ばかりでなく，体験して楽しむ企画もあります。「科学体験活動室」では「面白科学あそび」が行われ，親子で牛乳パックやトイレットペーパーの芯を使った「エアロケット」を作ったりします。また，折り紙教室やアート教室なども行っており，子どもたちだけでなく，親子での参加も多く，できあがった作品を大事に抱えて帰られます。

カエルがマークの「かえっこバザール」も行います。この写真はその時の風景です。使わなくなったおもちゃを「かえっこバンク」に持って行き，「カエルポイント」と交換しています。イヌやウサギやクマ，動物の縫いぐるみが沢山ありますね。ショップを手伝い，工作やゲームで遊んだりしてポイントをもらうこともできます。

次は，ボランティアさんの活動風景です。書架の本の整理整頓，傷んだ本の修繕，絵本の読み聞かせなど三つの活動のどれかを選んでしていただいています。ボランティアさんは，在日外国人の方も含め，300人以上が登録されており、各自の頻度は異なりますが，沢山の方に支えられていることを有り難いと実感しています。

この「世界の絵本コーナー」には，2011年の秋に100ヶ国、

4,000冊の世界の絵本が集まりました。外国の方だけでなく，世界の絵本に興味のある方にも来て楽しんでいただける部屋だと思います。この絵本は，例えば英語・仏語・独語・中国語等，言語別に分類してあります。スリランカの公用語で，シンハラ語という聞いたことのないような珍しい言語による作品もあります。

この世界の絵本の読み聞かせですが，写真は，民族衣装を着た女性と日本人の図書館司書が並び，原語と日本語で交互に読んでいる場面です。日本語でも説明すると内容が理解できるので，子どもたちには「言葉は違うが，日本と似ているな」とか，逆に，「国によってかなり違うな」という実感が湧き，世界の言語と文化が面白く伝わります。韓国の民族衣装チマチョゴリを着ている方が日本人，普段着の方が韓国の方です。タイの方も同じく民族衣装をきた方が日本の方です。

ベトナムのお月様に纏わる絵本のお話しには，日本の月への思いとの違いに驚かされました。

月面の模様について，日本では月にウサギが住んでいて餅つきをしているという伝承ですが，ベトナムでは次のような伝承でした。「昔々，ある所にある男の人がいました。その男の人は，毎日森で働いた後で一日の疲れを取るため，毎日一本の木の前で休んでいました。それはそれは寛いで気持ちよさそうでした。その木は，葉が薬になる木でした。薬に使うため，その木には毎日きれいな水をやっていました。男の人は奥さんにもこの木のために注意を与えていました。しかし，ある日，奥さんは間違えて汚い水を木にやってしまいました。すると，木は見る見るうちに大きく大きく天に伸びて行きました。仕事を終え，木の所に寄った男の人はびっくりして，その木に飛びつきました。男の人をしがみつかせたまま，その木は天を超え，どんどん伸びて月まで飛んでいってしまいました」という話で，月面の模様は，この木にしがみついた男の人の姿だというのです。同じ月でも，国によって随分違うものだなあと思いました。

こちらは，クリスマス会の折に，アメリカ人がサンタクロースに扮して英語絵本のお話し会をしてくれた様子です。

また先ごろ，世界絵本フォーラムが開催されました。色々な国の方々が参加してくれました。こちらは，韓国の方の小学生のお嬢さんが，大好きな韓国の絵本の一冊を日本語で紹介してくれた様子です。

午後のワークショップでは，例えばタイのブースでは，画面のようにタイの子どもたちがよくつくる折り紙を，参加者の親子で作っている様子です。

このように，図書館ではいろいろな体験やイベント，そして「豊かな読書環境」を整えて，こどもたちが少しでも本を楽しみ，本好きになるよう今後も工夫していくつもりです。

さて，お手元のプリントの裏面には，文科省が提示している「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－」が載っています。従来の図書館は「本を借りたい人だけがやって来る場所」でしたが，これからの図書館は来て借りてくれることを待っているだけの図書館ではなく、「市民に役立つ図書館」をめざそうという方向性が示されています。市民のニーズに立った図書館，それは，図書館員の意識改革をも同時に呼びかけているのだと感じます。

住民のニーズに対応し，住民の課題解決を支援できる図書館，こども図書館でも，一層学校図書館との連携も強化して良い本を多く揃え，地域の子どもたちが本に親しみ楽しめる施設づくりをすすめていきたいと考えています。

今，国の読書推進プランに従って，様々な読書プランが各市町村で実行されています。金沢市は「子ども読書のまち　金沢」というスローガンを掲げ，「人と本がつながるまち　人と人がつながるまち　本を通して世界につながるまち　金沢」を謳って広く活動しているところです。

取り留めのないお話をしてきましたが，最後に，大好きな石井桃子先生の次の言葉を紹介して，本日の講演の締め括りとさせていただきます。（石井桃子氏の言葉より）

「本は友だち　一生の友だち　こども時代に友だちになる本　そして大人になって友だちになる本　本の友だちは一生その人と共にある　こうして生涯話し合える本と出会えた人は，仕合せである」（仕合せ…原文のまま）

短い文章ですが，読書の楽しさや素晴らしさを伝える奥の深い言葉だと思います。私はこの言葉に感動し，これからも，素敵な本と子どもたちを繋げる架け橋になりたいと願っております。また，本日の話が，少しでも読書への興味に繋がれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

□質疑応答

谷中

岡先生，どうも有り難うございました。個人的にも大好きな作家や作品が出てきて嬉しくなりました。本を心の宝ものとして生きる力を持って欲しいという先生の熱意が伝わってきました。時間が押していますが，せっかくの機会ですので，どなたか感想や質問があれば，挙手願います。

越中谷

貴重なお話をお聴きし，有り難うございました。こども学科３年の越中谷と申します。一つ質問ですが，日本は趣味としての読書が少なく，世界の水準では下の方ということでしたが，こども図書館という立場を踏まえて，小中高での「好き・嫌い」「読む・読まない」という二極化傾向について，具体的にどのような対処や工夫をしていらっしゃるのか教えていただきたいと思います。

岡館長

鋭いご質問ですが，私どもも，子どもたちの読書離れを

如何に改善するかが大きな課題であると認識しております。

今行っているのは，１日２回，午前11時と午後４時のお話し会です。４時の方は，放課後の小学生たちも寄ってくれます。その時は，児童と未就学児を別の部屋に分けて，対象年齢に合わせたお話し会をするように工夫しています。

小学校高学年から中学生にかけてが，一番難しいですが，文芸部と共同して，泉鏡花・徳田秋聲・室生犀星について金沢三文豪の読書塾を開催したり，図書館司書が夏休みの課題研究に必要な図鑑調べ学習の指導をしたりしています。どれも小さな試みですが，地道に一つ一つを繋げ，読書の輪が広がるように今後も工夫を重ねていきたいと思います。

直江

岡先生，有り難うございます。こども学科教員の直江と申します。私が小さい頃は，図書館は大人が行く場所で，子どもには敷居が高いという印象でしたので，こども専用の図書館ができた時には，とても新鮮な感じがしました。それで，こども図書館とは先進的な試みだと思うのですが，日本中には，こども図書館に類する建物はどれくらいあるのでしょうか，お尋ね致します。

岡館長

こども図書館を建設する３年前に調べたところでは，全国に22館ありました。これらは，児童館やアミューズメントなどと複合した館が多く，独立館は８館だけでした。開館から３年が経ちましたが，この間，「自分の県にも，こども図書館を造りたい」と願う全国の方々が視察に来られたりもして，現在では30館を超えています。

谷中

電子紙芝居作成システムを始め，全国のこども図書館のモデルとなるような斬新な試みも多いと伺っております。

人間科学部こども学科にとっても大変有り難い施設ですので，機会ある毎に利用させていただきたいと思います。

□閉会のご挨拶と花束贈呈

馬場

岡先生，本や図書館のルーツから最新の情報まで，貴重なお話を有り難うございました。改めて御礼申し上げます。「大人になって友だちになる本」として，私の「心の宝もの」を紹介させていただきます。「戦争と子ども」というテーマは『ともだちのしるしだよ』と共通していますが，この『少年の木　希望のものがたり』です。帯には，「鉄条網をこえてつながる“破壊されないもの”廃墟に芽生えた緑の葉に水をやりつづけた少年からのメッセージー希望といのちの再生」と謳われています。心に響く本と出会うことは，未来の芽を伸ばすことと同じであると思います。

最後に，感謝の印として学生から花束贈呈がございます。

唐桑

岡先生，本日は貴重なお話を有り難うございました。私たちがこれから生きていく上で，本を読むことは凄く大きな力となることに気付きました。今後，この大切な教えを，子どもたちとの関わりの中でも伝えていきたいと思います。

岡館長

いくつもの部屋でお話し会がありますので，ボランティア活動で絵本の読み聞かせをしたいと希望する学生さんがいらっしゃれば，どうぞお申し込みください。

□講演会で心の宝ものと紹介されたブックリスト

①『GOODNIGHT　MOON　人生最初の一冊』
作：マーガレット・ワイズ・ブラウン／絵：クレメント・ハード／訳：瀬田貞二／出版社：評論社／発行年月：1979年９月

②『ともだちのしるしだよ』
作：カレン・リン・ウィリアムズ，カードラ・モハメッド／絵：ダーグ・チャーカ／訳：小林葵／出版社：岩崎書店／発行年月：2009年９月

③『だいじょうぶ　だいじょうぶ』
作・絵：いとう ひろし／出版社：講談社／発行年月：1995年10月

④『１年に１度のアイスクリーム』
作：ロビン・ロイド／絵：中川 学／出版社：コンテンツ・ファクトリー／発行年月：2010年10月

⑤『キラキラ読書クラブ　子どもの本644冊ガイド』
作･絵：キラキラ読書クラブ編／出版社：日本図書センター／発行年月：2006年２月

⑥『小惑星探査機　はやぶさの大冒険』
作：山根一眞／出版社：マガジンハウス／発行年月：2010年７月

⑦『星の王子さま』
作：サン・テグジュペリ／訳：内藤　濯／出版社：岩波書店／発行年月：1962年11月

⑧『スズの兵隊』
作：アンデルセン／絵：マーシャ・ブラウン／訳：光吉夏弥／出版社：岩波書店／発行年月：1996年11月

⑨『少年の木　希望のものがたり』
作・絵：マイケル・フォアマン／訳：柳田邦男／出版社：岩崎書店／発行年月：2009年９月